



1994年、大所帯で行った会社のスキー合宿。この3人は、スキを見てはカフェでサボっていた70年女トリオ。苗場はゲレンデにカフェが多かったのも女子的には◎



1996年、高校の同級生と2人でスキーバスを使って苗場に。スノーボードが流行り始めていた影響もあり、きーぼうの上着はストリート系



### 多彩なコース展開だから 体育会系合宿にも最適!

✓ 証言1

苗場といえば“ホテル付きスキー場でおしゃれなゲレンデ時間”というイメージがあるが、そんなスキーヤーばかりではない。私が参加した会社のスキー愛好会合宿は上級者が多かったため、サボれるムードではなく…。周りに合わせてガンガン滑っているうちに、「私もなかなか滑れるのかも」と勘違いし、全面コブの超上級者コースを攻めて転がり落ちて笑われたこともあった。ロマンスも何もあったもんじゃない。もう一つ残念なのは、“苗プリ”宿泊経験がないこと。手取り13万円の貧乏OLの定宿は徒歩圏内のペンション。それはそれでアットホームで楽しかったんだけどね。(編集部・きーぼう)

## 消費することが美德の時代、スキーが大ブームに

「冬になったら、スキーに行かない?」  
「冬になったら、スキーに行かない?」  
「冬になったら、スキーに行かない?」

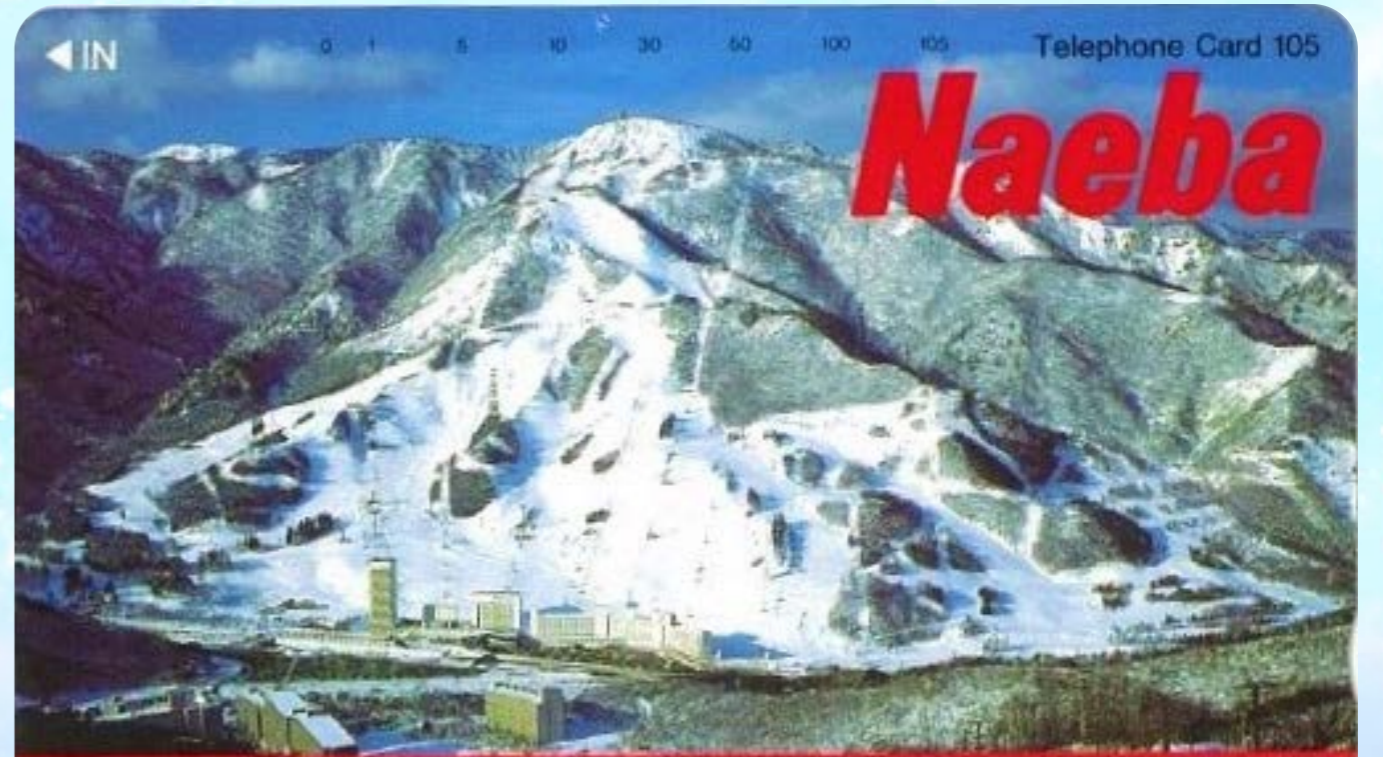
大渋滞にリフト待ち  
それでも苗場は大人気  
「冬になったら、スキーに行かない?」



PROFILE >>>  
堀井憲一郎/ほりいけんいちろう  
昭和33年京都府出身。週刊文春のコラムを中心に「何でも調べるフリーライター」として活躍。1993年、『TVおじゃマンボウ』にカウントダウンコラムニストとして出演し、テレビラジオに活躍の場を広げる。音楽から落語までサブカルチャーに幅広く精通し、スキーに関する著書も多数。花火師の免許も持つ。



トンネルの前後にはチェーンを脱着するための広いスペースがあった。チェーン装備をいかにスマートに素早くこなすかが男の見せ場だ。シーズン中はこの場所に、1回10000円のチェーンつけ屋なる存在もあった。ちなみに高速道路には、スキーにまつわるいろいろなものが落ちていた。スキー板にチェーン、ブーツ、グローブ。なかにはスキー板付きのキャリアアゴと路面に落ちていたのも、筆者は見たことがある。あれは危なかった。  
スキー人気に伴い、激しい渋滞も発生した。金曜深夜の関越で50km以上の渋滞が生じたり、都内の環八においては、東名高速用賀ICから関越道の東京側入口となる練馬ICまでわずか



# 私もスキーに連れてって

～苗場スキー場の思い出～

1980年代後半の遊びと言えば、スキーが欠かせない。そのなかでも苗場は、誰もが一度は行ったことがあるであろう、人気のスキー場だ。純粋に滑りを楽しんだり、映画のようなゲレンデでの素敵な出会いを求めたり。あの頃のスキー事情を振り返る。

取材文：小林良介



そくさと仕事を終えた金曜の夜、ガレージで愛車カローラIIのタイヤをスタッドドレスに履き替える矢野文男(三上博史)。スキー用具一式を積み込み、カーステレオにカセットテープを入れると、流れ出すのはユーミンの「サーフ天国、スキー天国」だ。  
1987年公開の映画『私をスキーに連れてって』の冒頭シーンである。70年女が17歳の年に公開されたこの映画は、若者たちに「これがスキーの新しい遊び方だ」というスタンダードを提供して見せた。  
この映画を機にスキーは空前の大ブームとなっていったのだが、それ以前から、国内各地のスキー場には徐々に多くの人が集まり始めていた。  
「スキー場が混み始めた理由、それはバブルだからです」  
こう断言するのは、幼少の頃からスキーに慣れ親しみ、全国津々浦々のスキー場取材してきた、コラムニストの堀井憲一郎氏だ。  
「バブル期から、急にお金をどんどん使っていていつかという流れになった。それまではスキーも慎重しやかに行っていただけでも、政府がもつと遊べと言いついて、じゃあ苗場プリンスに行

って一晩何万円も出して泊まってもいいかっていう空気感になっていった。日本史上初めて、消費することが美德っていうことになったんです」  
小さい頃から家族でスキーに行っていたという人も多いが、親抜きで仲間や友人とスキーに行くとなれば、そのデビューは高校を卒業した後が多いだろう。バブル期の始まりとスキー人気、そこに目を付け製作されたあの映画と、70年女世代のスキー場デビューの時期が、ピッタリ重なった形だ。  
またこの時期、週休2日制が普及し始めたことも、ブームを後押しした。西武グループ(当時の運営会社は国土計画)が苗場にホテルを増設。全国8ヶ所に同様のホテルを展開した。後を追って、JR東日本はガウラ湯沢、東武鉄道は会津高原だいらスキー場、松下電器はミネレースイスキー場、ヤマハはキロク・スノーワールドなど、大企業が続々とスキー場経営に参入。人気のスキー場は、週末ともなればすさまじい混雑となり、リフト待ち3時間も当たり前という光景が繰り広げられるようになったのだ。ゲレンデに流れていたBGMは、もちろんユーミンである。

# 苗プリは「ちょうど身の丈にあったお洒落で贅沢な」ホテルだった

空くことがなく、結局は越後湯沢駅まで車で送らせ、女子たちはそのまま新幹線で東京に帰ったという切ない実話も。今にして思えば別のスキー場に行くという選択肢もあったはずだが「苗場に行く」ことが目的だった彼女たちに、その発想はなかつた。

と、時にそんなレアケースもありつつ、苗場は女子率の高いスキー場であった。87年までの3年間で32ヶ所のスキー場に行き、さまざまな調査を行った堀井氏のレポートによれば、国内のスキー場全体の女子率は35%。そんな中、苗場は41・8%を記録している。これは斑尾、柺池、焼額山に次ぐ4位の数字だ。堀井氏いわく「女の子だけで41%超えると、女の子だらけっていうイメージになります」とのことだ。

ゲレンデでは映画のように、スキー板をハの字にした前走者の足の間に、同じくハの字にした後走者がスキーを入れ、数人で連なって滑る「トレイン走行」

のマネをした。しかしこれは転倒しやすく事故につながるのと他人の迷惑となるため「トレイン走行の禁止」という立て看板が焼額山に立てられた時期があったという。

多くの女子を集めた一方でしかし、苗場は決して初心者向けのスキー場ではなかった。むしろ中々上級者向けの、難しいコースが多かったのだ。にもかかわらずリフトの本数は多く機動力抜群で、初めてスキーに来た女子までがゴンドラに乗って山頂付近まで上がるものだから、ゲレンデは大変混雑した。

「初心者への迂回コースもあるけど、これが狭くて片側がガケでもって大勢で滑り降りるものんだからツルツルで、人がそこかしこに転がっていて、おまけに最後は大斜面に合流して、それでコースの名前が『らくらくコース』だ。あじゃあ」

堀井氏は著書『スキーの便利帖』の中でこう評しており、インタビューでも嘆いていた。「俺の記憶だとバブルに入る直前まではそこまで混んでなくて、

苗場はスキーのうまいおしゃれな人がいるイメージだったんだけど、87〜88年くらいで壊れちゃった。異様な人気で混みすぎて、コース上のコブの真ん中で立ち止まるような人まで出てきちゃって」

バブル期ならではの苗場の光景と言えよう。

昼間はスキーウェア  
夜はボディコンに着替えて

たとえスキーはうまく滑れなくとも、苗場には別のお楽しみもあった。それが「トリップバー」だ。元々は東京都港区の溜池でオープンし、やがて六本木に移転。日比野克彦のアートを前面に出した前衛的な雰囲気でも人気を博したこのディスコは、86年から苗場にも冬季限定の店舗を出した。南ゲート駐車場の先に建つ通称「苗J」を目指し、昼間はフェニックスのスキーウェアに身を包んでいた女子たちが、今度は岡本夏生のようなファッションアイコンに身を包み、雪の中を闊歩していたのである。当然、ハイヒールで派手に転ぶ

女子も続出した。

この店に限らず、日本各地のスキー場やそこに隣接するホテルには当時、即席のディスコが数多く存在していた。「今思うとめっちゃダサイ感じで、普通の喫茶店みたいなフロアにビカビカするものと音楽さえあればいだろうっていう、それだけで作ったディスコが新潟や長野にもありましたね」堀井氏もこう述懐する。筆者

もまた、こうしたディスコで「ahaの「アイク・オン・ミー」が大音量で流れていたことをよく覚えている。滑り、そして踊り疲れた後の苗場での宿泊は、もちろん苗場プリンスホテルだ。いわゆる「苗プリ」が大人気となった理由は、目の前がゲレンデというロケーションだけでなく、リゾートホテルでありながら、1泊2食付き民宿の2〜3割増し程度という、手が届く価格を実現したことが大きい。「ちょうどあの頃の、昭和の日本人の身の丈にあったお洒落で贅沢な感じ」(堀井氏)であったのだ。ちなみに、この

ホテルを予約するにあたり、並々ならぬ苦労が必要だったことを知る女子はあまりいないだろう。堀井氏は語る。「毎年9月1日の朝10時、全国



## 映画『私をスキーに連れてって』

1987年11月に公開された、ホイチョイプロダクション原作の映画。原田知世と、当時はまだそれほど知られていなかった三上博史のW主演。ゲレンデで出会った男女が恋に落ちるラブロマンスを軸に、シンクロナ率の高いパラレルターンやセリカGTfourによる雪道ドライブなど、スキーという遊び全体をおしゃれに描き大人気。幻想をかき立てられた若者はこぞってスキー場に行くようになり、スキーが大ブームとなる。この2年後に同じくホイチョイが製作した映画『彼女が水着に着替えたら』では、本作と同じ2人が主演し、今度はスクーバダイビングブームが巻き起こることとなる。

資料提供：鈴木啓之



## ゲレンデには原田知世似の白いウェア女子が大量発生

証言2

ものすごく混んでるって聞いていたからあまり乗り気じゃなかったけど、大学生の時に友達サークル主催で一度だけ苗場に行ったなあ。ゲレンデには、原田知世似の白いウェアを来た女の子がいっぱいたった。私と言えば、案の定、あまり滑ることもできず、それほど楽しめないまま帰って来た思い出が。確かマハラジャだったと思うけど、期間限定のディスコがあって、友人の1人だけがサークルの人と行っちゃって。私は残された友人と「あんなの行ってもしょうがないよね」と言いながら、悶々と長い時間をホテルの一室で過ごしたような記憶が。(イクコ)

## まだまだある苗場話



上下つなぎの真っ白いウェアを買ってトイレの狭い個室で脱ぎ着に悪戦苦闘していたら、当時は今ほどキレイじゃなくて●こが付きちゃって、一度しか着てないのに、そのまま捨てて帰った(涙)。  
リッコ

いろんな地方からの出身者が集まっていた専門学校時代、スキーに行くといえば苗場に行くことだった。無理して買った車にスタッドレスタイヤを装着していたことで、チェーンの脱着がなかったことはみんなに褒められた。  
高橋武文 (53歳・男)

ユーミンの「サーフ&スノーコンサート」に行けたのはいい思い出。お客さんも200〜300人くらいしかなくて、ユーミン本人が観客と会話しながら、その場でリクエストも受け付けてくれた。  
荻原弘美 (52歳・女)

苗プリ宿泊者のリフト券はナイターを含めたホルダー式1日券が買えるけれど、宿泊していない人は夕方5時までのストックにつけるシール式1日券しか買うことができなかった。それをこのほりみたいにくさん貼っていたのは、今思えば恥ずかしい思い出。  
伊藤輝義 (51歳・男)

ベアのリフトを「ロマンスリフト」と呼ぶのは苗場をはじめ、プリンス系のスキー場の特徴。知らない人と隣同士になると、会話がなまま上っていくのがなんだか気まずかった。  
小浦光江 (50歳・女)

のプリンスホテルの予約が開始になるんです。家の電話ではなく公衆電話の方が繋がりがやすいって噂があったから、9月はまだ暑いのに、電話ボックスの中からテレホンカードを使ってくるんです」

まるでコンサートチケットのようだが、さすがにワンシーズン全部屋の予約電話なので数時間ソールドアウトするわけではない。それでもクリスマス、正月、連休や土日などはあつという間に埋まってしまうのが常であった。

「彼女がいるからって予約したレストランと同じで、キャンセルも多かったと思います」

結局、予約した時とは別の彼女と行くことになったちゃっかり系のモテ男も数多くいたことだろう。またそうしたカップルとは別に、貧乏だけど苗プリには泊まりたいという若者も大勢いた。2人部屋を予約しておきつつ、それ以上の人数で泊まり込むという、違法な滞在スタイルを敢行する猛者も少なからずいたものだ。

楽しかった思い出も、散々な思い出も、苗場には全てが詰まっている。耳をすませば今も、「恋人はサンタクローズ」が聞こえてくるようだ。

